Is there any way to rescue Japanese people trapped under the spell of learning English?(3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: OTOMO, Nobuhide メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00059396

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



英語学習の呪縛から逃れる道はどこにあるのか？ (3)

－英語修得のための課題とその解決－

Is there any way to rescue Japanese people trapped under the spell of learning English?(3)

大　友　信　秀

5．日本人の英語学習の弱点

前章では、英語を使用するために必要な能力を、情報受信や発信という場面から特に気を付けなければいけない点に絞り列挙した。本章では、英語活用に際して現れる日本人に特徴的な弱点を英語の構造（名詞、動詞という分類ごとに）に沿って列挙する。

(1) 名詞の単数・複数の使い分けがわからない

①日本語には名詞の単数と複数の差異がない

英語で使用する名詞は、具体的な物に関する限り、原則として、単数か複数かを厳密に区別し、単数の場合は名詞の前に不定冠詞（a・an）を付し、複数の場合は複数形で示す。例外的に、液体や気体、その他、慣習的に複数のものを一つのまとまりとして、つまり数ではなく量（massという一定のまとまり）で把握してきたものに関しては、単数形のみで表現するため（単数形しかないため）不定冠詞については無冠詞で使用する（なお、慣習的に原則として複数形のみで表現される名詞もある）。

これに対して、日本語では、一つであろうが複数であろうが、名詞をそのまま使用して示すことが原則であり、複数を示すために単語の語尾に「たち」や「ら」を使用することは必ずしも必要ない。このため、日本人にとっては、日本語を話す日常とは異なり、単数なのか複数なのかということを意識しなければ、英語で名詞を正確に使用することはできない。にもかかわらず、学校教育

ではこの点を強く意識した教育が行われているわけではない[1]。

②単数の名詞は3種類ある（可算名詞と二つの不可算名詞。）

上述のように、英語の名詞には、原則として数を数えて不定冠詞を付したり複数形を使用する可算名詞という名詞と、常に単数でしか使用しないため不定冠詞を付すことを要しない不可算名詞という名詞がある。

そして、このうち後者の不可算名詞は、概念などを示す抽象的名詞と雪や泥などのように具体的なものではあるが一つのまとまりとしてとらえられる物を示す名詞群とに分けられるとされる[2]。

このように分類されてしまうと、日本人にはますます名詞のことが分からなくなる。なぜなら、日本人は抽象的名詞というものを具体的名詞から分ける習慣もないからである。したがって、何が具体的名詞で何が抽象的名詞かを明確に知ることができなければ、日本人には不可算名詞を意識して名詞を使いこなすなどということはできないことになる。

さらに問題を難しくするのは、ほとんどの名詞は、具体的名詞としても、抽象的名詞としても使用できるということである[3]。たとえば、犬を意味する英語の名詞dogを具体的名詞として使用すれば、実際に生きて動いている犬や過去に生きていた犬を意味することになるが、無冠詞単数形で使用すれば、四つ足で狼を祖先に持つというような、概念としての「犬」という動物を意味するこ

1　そのため、日本人に特徴的な間違いとして指摘されている。たとえば、山岸勝榮『まねてはいけない！マズい英語』（学研プラス、2016）137頁参照。

2　*See*, John Seely, Everyday Grammar, OXFORD, 2004, at 21 “There is a samall group of nouns which refer to things and ideas which cannot be counted. These are generally abstract ideas, like innocence and things which we think of in the mass rather than as single or plural objects-like mud, or snow.”

3　この点について、明示しているものとして、『120%科学英語』（化学同人、1994）11-14頁参照。*See also*, William Geldard, Elements of English Law, Oxford University Press 1911, at 1.（無冠詞単数のlawと不定冠詞を伴うa lawでは、前者が我々の行動を決めているシステムとしての法全体、後者が具体的な個別の法令を指すことを説明している。）。マーク・ピーターセン『日本人の英語』（岩波新書、1988）18-19頁も参照。

とになる。英語で私は犬が好きです。と言いたい場合には、したがって、I like (or love) dog,でも、I like a dogでもなく、I like (or love) dogs.[4]と言う必要がある。

(2) 不定冠詞と定冠詞の使い方がわからない

不定冠詞a、anとtheの使い方（使い分け）が苦手な日本人が多いことは、これに関する書籍が数多く出版されていることからも分かる[5]。この使い方の問題を不定冠詞と定冠詞の対立構造（使い分けの問題）と把握しても、その答えは見つからないのは、theは必ずしも不定冠詞と対立構造にあるわけではなく、複数形にも使用されるということからも明らかである。つまり、theは何らかの理由でaやanが変化したものではないということである。

定冠詞theの説明で、会話（や説明）に初めて登場する（単数名詞の）場合は不定冠詞を使用し、二度目からは定冠詞を使用する、というものがあるが、これは正確な説明ではない。定冠詞は、不定冠詞とは違い、名詞を一般的なものから一つの対象に特定する役割を持っている。そのため、複数形の名詞に対しても、それがたとえば、特定の選手たち(players)や特定の学生たち（students）と示すことできる（もしくは、示さなければならない）ものであれば、theを定冠詞として使用することになる。

日本語では、このような定冠詞を使用した名詞は、「その○○」や「あの○○」として、英語では代名詞を使用するthis 〜、that 〜、these 〜、those 〜と同じように表現できるため、これら代名詞を使用する場合と定冠詞を付す場合の区別が極めて困難になってしまう。

そのほかにも、goodやwellの最上級であるbestにはtheをつけるというようなことを習うが、goodやwellは、形容詞もしくは副詞であるため、その最上級であるbestも名詞ではない（bestには名詞として、最上の人や最上の物の意味もあるとされるが、その場合も、bestの後ろにpersonやthingが来ることが想像で

4　もしくは、I like (or love) the dog.

5　大友信秀、「英語学習の呪縛から逃れる道はどこにあるのか？ (2)」金沢法学62巻 2 号 86頁注18参照。

きるため、形容詞や副詞として使用されている場合との区別は容易である。)。bestにtheが必要な場合というのは、bestの後ろの名詞が省略されている場合であり、形容詞や副詞として使用されている場合は、当然theは必要ないことになる。

(3) 代名詞がわからない

①人称代名詞と指示代名詞の違いがわからない

英語で人を別の人に紹介する場合に、This is ～ .という表現を使用することに違和感を感じた記憶があるのではないだろうか。日本語で人を紹介する場合は、「こちらは、～。」という表現もあるが、女性であれば、「彼女は、～。」、男性であれば、「彼は、～。」という表現を使用することができるのに、これをそのまま英語にあてはめ、She is ～ .やHe is ～ .とはできない[6]。

このことは、英語におけるSheやHeという人称代名詞は、定冠詞と同じように、(すでに知っているため)特定できる対象に対してしか使用できないため、初めて紹介される（したがって、すでに知っているはずがない)相手には使用できないことによる。

このように、英語で使用する代名詞という言葉をなんとなく、日本語にあてはめても、意味が通じないことになるため、そのような分類ではなく、定冠詞と人称代名詞をその機能から同じ分類にまとめるというような工夫が必要になる[7]。

6　山岸、前掲注１、140－142頁は、これも日本人に典型的にみられる間違いであると指摘する。

7　人称代名詞とされるものの日本語と英語における根本的な相違について、金谷武洋『日本語に主語はいらない』(講談社、2002）21頁以下、金谷武洋『英語にも主語はなかった』(講談社、2004）68-71頁参照。

(4) 自動詞と他動詞の違いがわからない

①日本語の自動詞・他動詞と英語のそれは違う

英語の他動詞は、直接目的語をとる動詞とされ、それ以外が自動詞とされる。そして、日本語についてもこれをそのまま持ち込み、日本語の場合は、「～を」をとるものが他動詞でそれ以外が自動詞とされる。しかし、これに対しては、日本語では、自動詞が「～を」をとれること、自動詞で受身文が作れることを例に、英語との間に根本的な構造の差異があることが指摘されている[8]。

英語における自動詞と他動詞の違いは、前者が主語の属性、主語自体の状態や動きを示すのに対して、後者は、主語と目的語という二つの物の関係性を示している。これに対して、日本語における自動詞と他動詞は、それぞれ、前者が「ある（人間のコントロールの利かない自然の勢いと状態）」、後者が「する（人間の人為的、意図的行為）」から派生しており、機能的に全く異なる[9]。

そのため、日本語で「～を」をとる動詞が他動詞だという指針を英語学習に応用することは不可能であり、混乱の素でしかない。

②自動詞と他動詞の違いよりも文型（5つの）の類型で学習させられる

さらに問題を深刻にしているのは、5文型による教育である。他動詞は直接目的語をとり、自動詞はとらないとされるが、第2文型（SVC）と第3文型（SVO）とは、両者がともに名詞＋動詞＋名詞という構造をとっているため、形の上では見分けがつかない。そのため、他動詞は直接目的語をとり自動詞はとらないということが動詞を見分ける基準にならないため、これは自動詞、これは他動詞というようにあらかじめ何が自動詞で何が他動詞かということを暗記しておくほかないことになる。そして、文型の外観からは見分けがつかないということは、第4文型（SVOO）と第5文型（SVOC）にも言えることであるため、5文

8　金谷武洋『日本語に主語はいらない』177頁以下参照。
9　同上、201頁参照。

型による英語の学習のためには、これを活用できるようになるまでにある程度の数の動詞を暗記することが必然的に求められるということになる。

このような学習方法は、英語圏で子供のころから英語を使用している者には効果が見込めるが、ゼロから学習を始める日本人にとっては非効率な学習方法であると言わなければならない（少なくとも5文型に入る前に、自動詞と他動詞の違いについて基本的な説明を行っておく必要がある。）。

(5) 動詞と時制（それに関係する動詞の形態変化）の関係がわからない

①時制が文法的に意味のないものになっている

時制（tense）という文法用語は何のためにあるのであろうか。時制には、現在、過去、未来があるとする説明が一般的である。動詞の形として未来形がないことを認めながらも、willのような助動詞とともに未来という時制を表現しているとも説明される[10]。

このため、過去形を使う場合は過去のことで、現在形を使う場合は現在のこと、というような理解が強制され、仮定法にはなぜ過去形が使われるのか、現在分詞が過去のことを示すのはなぜか、過去分詞が多くの場合（他動詞に対して使用されるため）受け身の意味になるのはなぜかというようなことを説明できなくなる。

②英語の時制（現在・過去）の機能は時間の問題（だけ）ではない

現在のことは現在形で表現し、過去のことは過去形で表現する。これは現在という世界が基点になり、そこから記憶している別の時間を説明するという関係にある。未来のことは、確実性の高いことについては現在がそのまま続いていけばそうなるという意味で、進行形やbe going toという形を使用して説明することができる。また、自分がそう思っているだけだが、未来の予定についてはwillで説明することも可能である。これら未来に関する内容は、まだ到来し

10　*See, e.g.*, Seely, note 2 at 63.

ていないため、確実なこととして説明できないため、時制があてられていない。

さらに、仮定法という表現は、現在を基点とする仮定では過去形を使用し、過去を基点とする仮定では、過去完了形を使用する。現在を基点とする表現なのに、なぜ過去形を使用するのであろうか。それは、現在まさに実在しているものごとについては、現在形を使用できるが、現在ではあるが実在していないものごとについては、時制を一つずらした過去形を使用できるからである。このように、過去形というのは（過去という時制は）、現在を基点にして時間が前のことや、現在を基点にして、現実が横にずれていること（実際にはないこと）に使用できる形態である。このような過去形の使用方法は、丁寧な表現（Will you ～ ?という表現を丁寧な表現にするために Would you ～ ?にしたり、Can you ～ ?を Could you ～ ?にするところ）にも現れている。

このように、現在が中心となり、場面を時間的に、また実在的に一つずつずらせるものが過去形（時制）ということがわかれば、仮定法になぜ過去形を使用するのか、ということが外形的に理解できる（時制という概念を文法上の道具として使用することができる）。

③現在というのは、今この瞬間だけ

さらに、現在進行形ではなく、単純な現在形を使用すると、今やっていることではなく、習慣的に行っていることを表現できることや、to不定詞と現在分詞（～ ing）の違いや、現在分詞が過去の行為を示すことに使用されるのはなぜか、というようなことも、英語における時制やそれに対応した動詞の形との関係で（つまり外形的に見ることで）理解できる。

英語の動詞には、現在形というものとは異なる原形というものがある。これは、時間軸等とは切り離された中立な形（したがって、この世にない）である。そのため、そのまま現在形として使う場合には、今やっていることではなく、習慣的に行っていることという、より広い概念を示すものとして機能することになる。これに対して実際に行っていることについては、現在進行形（～ ing）

が使用される。動詞が後ろにto不定詞をとるのか現在分詞をとるのか、ということについても、現在分詞は実際にやっていること（やること）でto不定詞は（これからやるかもしれないことを含め）まだ行っていない時間との関係では中立的な行為と捉えれば理解しやすい。そして、現在分詞が過去の行為をも示すことができるのはまさにこの点で、過去の行為は実際に行った行為であるため、過去の行為を示すものとして使用できる[11]。

④日本語の時制

日本語では、現在と過去を示す動詞の形は、「する」という語尾を「した（た）」に変えることで使い分ける。これに対して、現在と未来の形は基本的に同じである。英語のように、（動詞自体の形態として未来形があるわけではないが）未来を表現する形が明確にあるのとは異なり、日本語では外形上、時制は過去と現在しかないことになる。また、英語における過去分詞と現在分詞の関係や、to不定詞と現在分詞や原形と現在形の関係（非・未現実世界と現実世界）という構造も持たない。

このため、日本人が英語の動詞の時制を理解し、それに連動する動詞の形（原形、現在形、過去形、to不定詞、現在分詞、過去分詞）を活用するためには、この英語の構造を正確に反映した教育が不可欠である。

(6) 日本語には主語がない（必要ない）ため、主語が必要な英語をそのままでは理解できない。

（未完）

11　なお、他動詞の過去分詞は受身の意味となるため、過去に行った行為を示すことには使用できない。